

全国鳥類繁殖分布調査

ニュースレター 第7号

2017年2月6日



ベニヒワ (藤井 薫)

2年目を迎える全国鳥類繁殖分布調査

今年度からはじまった全国鳥類繁殖分布調査。前号のニュースレターでもご紹介しましたが、夏鳥が復活している可能性が見えてくるなど、成果があがりつつあります。来る繁殖期も、サントリー世界愛鳥基金、自然保護助成基金の支援の下、さらに活発に活動を進めていきたいと思っております。調査へのご参加、ご協力よろしくお願いたします。

調査の登録状況

繁殖分布調査では、決められた3kmのコースで現地調査を行ないます。これまでに約半分のコースの担当者が決まりました。しかし地域によってはほとんど調査者の決まっていない場所もあります(図1)。また調査者が決まっている地域でも、現地調査だけではその地域の繁殖鳥類を完全に把握することはできません。アンケート調査でそうした「漏れ」を補っていかうと思っておりますのでぜひ情報をお寄せください。

調査への参加方法

アンケート調査は以下のWEBサイトあるいは「いきものログ」の特設サイトから情報を送るだけです。ただし、「いきものログ」を使う場合は事前の登録が必要です。

WEBサイト <http://www.bird-atlas.jp/bbaq.html>

いきものログ <http://bird-atlas.biodic.go.jp/>

現地調査はまず調査者登録をしてください。

<https://db3.bird-research.jp/~birdatlas/volunteer.html>

登録をすると、事務局から調査地の地図をみることのできるホームページのURLが送られてきます。その地図

をご覧ください、その中から調査可能な調査コースを選んでください。

皆さんの調査への参加、お待ちしております。

【植田睦之 バードリサーチ】

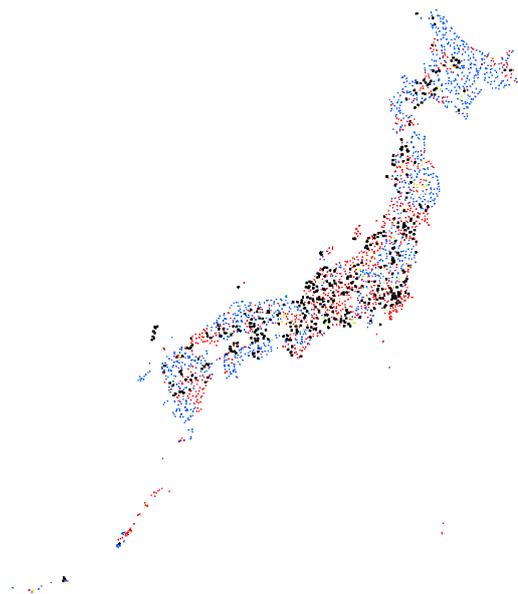


図1 現在の繁殖分布調査の登録の状況。黒が2016年に調査が終わったコース。赤が調査責任者が決まっているコース。緑が調査協力者はいるけど責任者が決まっていないコース。青はまだ調査者がいないコース。

東京都鳥類繁殖分布調査が始まります

全国鳥類繁殖分布調査では20kmメッシュのスケールで分布図を描きますが、東京ではより細かい1kmメッシュでの分布図を描く調査が行なわれてきており、今年から3回目の調査をすることにしました。そして東京には固有種が多い伊豆諸島もあります。今回の調査ではこうした島の調査もはじめます。



アカコッコ(高須英之)

さまざまな環境を含む東京

1603年に徳川家康が幕府を開いてから東京は日本の首都として発展し続け、現在は約2000km²の中に1300万人が暮らしている世界有数の大都市です。一方で東京都は高層ビルが立ち並ぶ都心部だけでなく、多摩地域や伊豆諸島などの島嶼地域も含んでいて、面積が小さくてもバラエティに富んでいる事も特徴の一つでしょう。様々な環境を有している東京なので、観察できる鳥類も実に様々です。東京西部の高尾山では山の鳥に出会えるし、東京湾に行けば海鳥を眺める事もできます。伊豆諸島や小笠原諸島まで足を運ぶと、島に生息する鳥類を見る事もできます。また、都心部でも明治神宮や皇居、代々木公園などの緑地が残されていて、そこでも様々な鳥を見る事ができます。たとえば明治神宮の月例探鳥会では20年間で93種が観察されたそうです。

このように東京は面積が小さいながら、様々な環境が入り乱れていて、東京都内に生息している鳥類を把握する事は容易ではありません。そこで東京都では1973～1978年、および1993～1997年に島嶼を除く都内全域で1kmメッシュで鳥類の繁殖状況調査を行なっていま

す。東京都を区切った約1kmのメッシュのうちの300か所以上でラインセンス調査を実施しているのです。また、アンケート調査や文献調査も行なっていて、それを含めると東京都本土のほとんどがカバーされています。

現在行なわれている全国鳥類繁殖分布調査は20kmメッシュ(1kmメッシュの400倍の大きさ)の中で2カ所を調査する方法を採用しており、東京がいかにか詳細に調査しているのかがわかります。これはイギリスの繁殖分布調査と同じサイズですので、図2のような美しい分布図を書くことも可能となってきます。これだけ詳細な調査なので、鳥類の分布変化も細かく見る事ができます(図1:過去2回の調査成果は全国鳥類繁殖分布調査ニュースレター第3号に掲載されていますので、そちらをご覧ください)。



図2 イギリスのヒガラの分布図。東京都繁殖分布調査では、これに負けない詳細な分布図の作成を目指します。

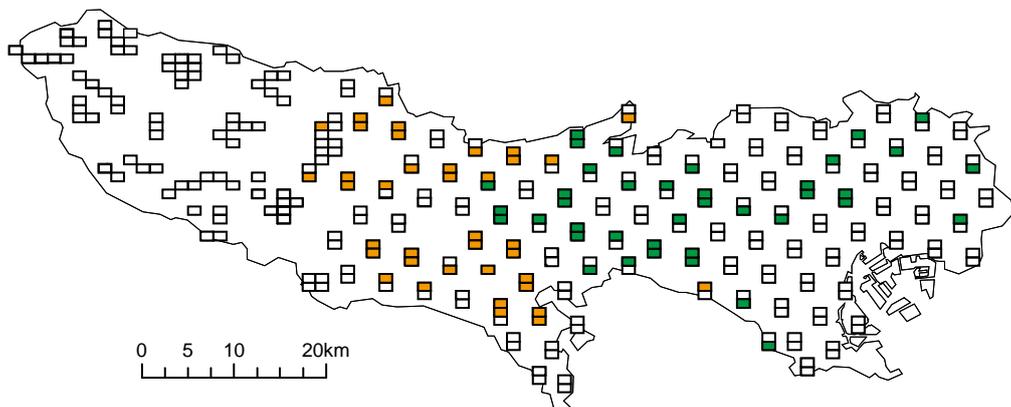


図1 1970年代と1990年代の結果の鳥類相解析から明らかになった草地の鳥が少なくなった調査メッシュ(■)と樹林性の鳥が増えた調査メッシュ(■)。都心とその近郊で樹林性の鳥が増え、多摩地域で草地の鳥が少なくなったことがわかる



東京都で繁殖するオーストンヤマガラ(西村四郎)とコゲラ(森田清次), キビタキ(藤井 薫)

90年代に実施されてから20年が経過し、3回目の調査を考える時期となりました。この20年間でも東京都の環境は変化し続け、鳥類も影響を受けているでしょう。20年毎のデータが3回分あれば、東京の変化と共に鳥類がどのように変化してきたのか、これまで以上に明らかとなります。また、東京都レッドデータブックの改定や今後の都市開発を考える上でも重要なデータとなるはずで

す。残念ながら東京都では予算の目途が立っていないとの事なので、NGOが主体となって調査を開始する事にしました。たくさんの地点を調査する必要があるため、皆さまのご協力が不可欠です。ぜひ、調査にご参加ください。100年後も色あせる事のない成果を残しましょう。

新たに追加する調査地:伊豆諸島

伊豆諸島は大小100近くの島で構成されており、そのうち9島が有人島です。この9島は空路や海路で本土から行くことができますが、島によってはアクセスが困難な場所もあります。

たとえば青ヶ島。東京本土から350km南に位置する絶海の孤島には本土から八丈島経由で行く事ができます。しかし、八丈島と青ヶ島の海路をつなぐ、「あおがしま丸」の就航率は50~60%です。同じく御蔵島も三宅島からの就航率が70%程度との事で、これらの島には、予定通り上陸できない、あるいは予定日に帰れないというリスクがあります。これまでの東京都の繁殖分布調査で島嶼部が含まれなかったのは、こういったアクセスの難しさも関係していると思います。

しかし、伊豆諸島はアカコッコやオーストンヤマガラ、ウチヤマセンニュウなど、本土では見る事のできない固



図3 三宅島(山本 裕)

有種や固有亜種が生息しています。また、海鳥の重要な営巣地としての機能も持っており、生物多様性の保全上、重要な役割を持っています。たとえば、御蔵島は世界最大のオオミズナギドリ(オオミズナギドリ)の繁殖地です。御蔵島は元々、哺乳類がほとんど生息していなかったため、海鳥の営巣に適していました。しかし、現在は哺乳類が持ち込まれていて、鳥類の繁殖に影響を与えている事が調査によってわかっています。規模の小さな島では、移入種に対して特に大きな影響を受けやすく、事実、移入種により数を減らしてしまった島嶼の鳥はこのオオミズナギドリ以外にも多くいます。

伊豆諸島のこれまでの調査を調べてみると、山階(1942)や樋口(1973)が複数の島で鳥類相の調査を行なっています。他にも、種を限定した調査や研究は単発的に行なわれていて、伊豆諸島がこれまでの鳥類学者を魅了してきたことが伺えます。しかし、伊豆諸島10島を調査した樋口(1973)は「たとえこれまでで行なわれた調査結果のすべてを重ね合わせたとしても、それぞれの島で繁殖している鳥の種類すら、まだ明らかになってはいないことがわかる。」と冒頭で述べており、基礎的な調査がそれまで十分に実施されていない事を明記して

います。それ以降も、繁殖分布調査のような網羅的な調査は行なわれていません。そして、たとえばモスケミソサザイのような絶滅危惧IB類で伊豆諸島の固有亜種でさえ、個体数について資料がなく、詳細は不明とされています。このような現状を踏まえ、伊豆諸島も詳細な基礎的な調査を行なった方が良いと考え、東京都繁殖分布調査では、伊豆諸島の9島も対象地としました。

本調査は5月中旬から6月後半の週末に行ないます。こちら調査員を募集致しますので、是非、週末に伊豆諸島に行きましょう。

調査参加方法

調査に参加して頂ける方は、まずホームページから、参加者登録をしてください。

<http://www.bird-atlas.jp/tokyo/volunteer.html>

全国鳥類繁殖分布調査にすでに参加者登録をしている方も、こちらで新たに登録をお願いします。東京都以外にご在住の方の参加も歓迎致します。登録をして

いただいた後、調査コース登録をおこなうためのURLをメールでお送り致します(2月下旬予定)。そこで、調査可能な場所を登録してください。調査方法等の詳細についてはホームページをご確認ください。

伊豆諸島調査は、5月中旬から6月下旬の間に行います。木曜夜(島によっては金曜夜も可)に竹芝桟橋から船に乗って島に移動し、滞在中に調査をして日曜の夜に帰ってきます。

調査協力団体募集

東京都の各地域で活動されている野鳥関係団体様もぜひ調査にご協力ください。普段、活動されている場所での調査をお願いします。団体として、ご協力して頂ける場合は、sato@bird-research.comまでご連絡下さい。ホームページ内の調査協力団体に掲載させていただきます。

【佐藤 望 バードリサーチ】

詳細な分布調査 茨城県でも

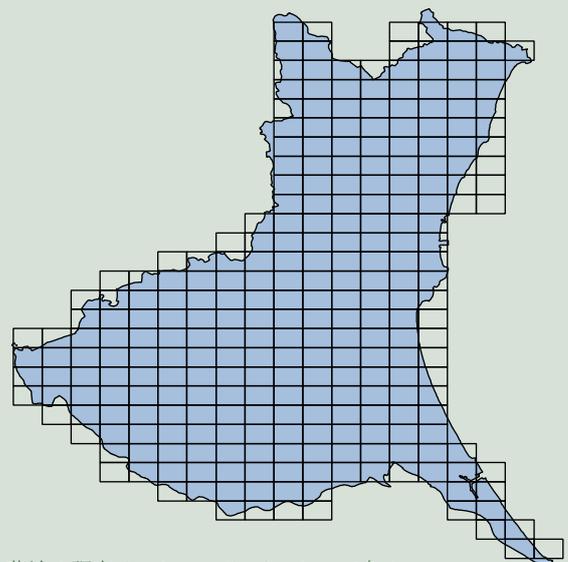
詳細な分布調査を予定しているのは東京だけではありません。「日本野鳥の会茨城県」が中心となって茨城県内の詳細な分布調査も計画されています。

茨城県内を約5kmのメッシュで区切った全240メッシュを調査し、分布図を描くことを目指します。

調査に参加したいという方は、事務局(bbs@bird-research.jp)までご連絡ください。

また、ほかの県でも詳細な分布調査を考えている方がいらっしゃるかもしれません。調査者募集の広報や取りまとめを事務局でお手伝いさせていただきます。県単位といった大きな範囲ではできないけれども、市町村単位でやりたいという方もいらっしゃるかもしれません。東京都繁殖分布調査と同じスケールでの調査が全国各地の市町村から集まってそれを比較することができたら、鳥類相にあたる気候や周辺環境の影響を明らかにできそうです。

ちなみに香港でも同様の調査がはじまっていますので、情報交換しつつ、アジアの鳥類相に影響する要因も調べたいな、と夢見ています。



茨城の調査メッシュ。5kmメッシュで鳥の生息状況を把握する

越冬分布調査も始めます

カシラダカがIUCNのレッドリストで絶滅危惧種になりました。また、温暖化で越冬分布を広げている鳥もいます。そこで、繁殖分布調査だけでなく、越冬分布の情報も集めることにしました。アンケート形式で皆さんの観察記録を収集します。調査へのご協力よろしくお願いいたします。



ミヤマホオジロ(佐々木 均)

カシラダカが絶滅危惧種に

冬に里山に行くと群れ飛ぶ姿をみることができるカシラダカ。そのカシラダカがIUCN(国際自然保護連合)のレッドリストの改定で、絶滅危惧II類に選定されたことに驚いた方もいらっしゃると思います。



図1 世界的に減少しているカシラダカ(小峯 昇)

同じくホオジロの仲間であるシマアオジは既にその分布、生息数の減少が知られています。ヨーロッパ地域では、分布の西端のスカンジナビア半島などからはなくなってしまっていて、ロシア西部でも南の繁殖地からはシマアオジはいなくなり、北部に生息するのみです。そして、生息している場所でも生息密度は低くなってしまっています。

カシラダカもシマアオジと同じように、ヨーロッパの繁殖地で分布域、個体数ともに急激に減少してしまっているそうです。そして日本でも福井県織田山の標識調査の捕獲記録でカシラダカが急減していることが報告されています(米田・上木 2002, Edenius et al. 2016)。まだシマアオジほど少なくはないのですが、シマアオジの二の舞になってしまうのではないかと心配され、今回、絶滅危惧II類に選定されたのです。

では、なぜカシラダカは減少しているのでしょうか？ 現在までのところ、よくわかっていません。カシラダカの分布はシマアオジと似ているので、シマアオジと同様に中国で狩猟されていることも一因と考えられています。日本でカシラダカがよく見られる谷津田的な里山では開発や耕作放棄など環境の変化が起きているので、そ

第3回自然環境保全基礎調査(1988年) 第2期越冬期(2008-2012年)

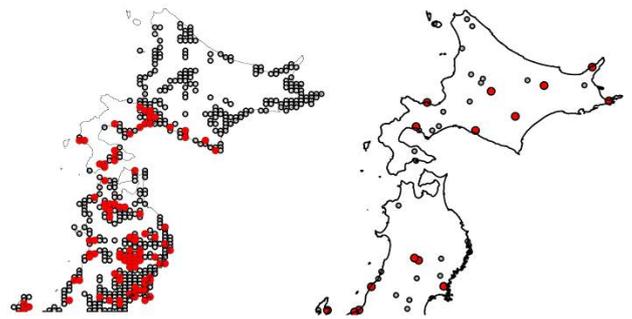


図2 1980年代と2000年代の越冬期のミソサザイの分布の変化。●はミソサザイが記録された場所、○は調査をしたが記録されなかった場所。1980年代には記録されなかった北海道中部から東部にかけてのエリアで越冬期の分布が確認されるようになった

うした変化も減少の原因の可能性がありそうです。また、ロシアなどの繁殖地でも森林火災や伐採などによる環境変化が考えられています。

越冬分布が広がっているミソサザイ

逆に分布域が広がっている冬鳥もいます。その1つがミソサザイです。環境省が行なっているモニタリングサイト1000の結果からは、これまで道南から道央の太平洋側でしか越冬していなかったミソサザイが、道東でも越冬するようになるなど、越冬分布が広がっていることが見えてきています(図2)。温暖化で、厳寒により越冬できなかった地域の気象条件が緩和されたことにより、越冬域が広がっているのかもしれません。

越冬分布調査始めます

このように冬鳥は数も分布も大きく変化していると考えられます。そのため、繁殖分布だけでなく、越冬分布も明らかにしていく必要があると思います。1980年代に環境省により行なわれた全国調査の情報がありますので、



越冬するホオアカ(中島 直), ツグミ(長塚美代子), ケアシノスリ(矢田新平)とフクロウ(越後 弘)

今回、情報蓄積をして過去の調査と比較することができたら、さらに多くの種の状況が見えてくるのではないのでしょうか? 「繁殖分布も把握できていないのに…」と思われるかもしれませんが、越冬分布調査も始めたいと思います。

調査の方法

冬鳥の様子は年によって大きく変わります。毎年のように、今年は冬鳥が多いとか、少ないとか話題になります。実際、今年は東京の低地の林では例年はみられないアトリが観察されています。また、カラ類の混群のように、群れになっているものも多く、なわばりをもってまんべんなく分布している繁殖期と違って、数回の調査でそ

の数を明らかにすることは困難です。

そこで、繁殖期の調査のようにセンサスはせずに、皆さんの普段の観察の情報をアンケート形式で収集する方法を取りたいと思います。

対象種は留鳥、漂鳥、冬鳥などすべての種。期間は2016年から20年の越冬期です。情報送信の方法は2つ、Excelファイルで送っていただく方法と、WEBフォームから送る方法です。ぜひ、越冬分布を明らかにする調査にもご参加ください。

ホームページ : <http://www.bird-atlas.jp/winter.html>

送信WEB : <http://www.bird-atlas.jp/wba.html>

入力用Excel : <http://www.bird-atlas.jp/data/wba.xls>

【植田睦之 バードリサーチ・荒 哲平 日本野鳥の会】

若手調査員募集 ~レンタカー代補助します!~

全国鳥類繁殖分布調査は今回だけではなく、将来にわたって実施していきたいと考えています。そのため、若手調査員の参加が欠かせません。

すでに、大学サークルで調査に参加してもらったりしていますが、そういった学生さんたちと話をしていると、参加のハードルになっているのが、調査地まで行く足がないことと聞きました。

そこで、次の繁殖期から、学生など若手限定で、レンタカー代を事務局で負担して調査をしていただけるようにしようと思います。

レンタカー代の補助を希望される方は、事務局にお申し出ください。調査への参加、お待ちしております。

申し込み先: bbs@bird-research.jp

全国鳥類繁殖分布調査ニュースレター 第7号

2017年2月6日 発行

編集: 植田睦之, 尾中 潔, 柏崎安男, 佐藤 望, 藤田 薫

© バードリサーチ・日本野鳥の会・日本自然保護協会・日本鳥類標識協会・山階鳥類研究所・

環境省生物多様性センター

URL <http://www.bird-atlas.jp> <https://www.facebook.com/birdatlasjp> https://twitter.com/bird_atlasjp